県立図書館だより

平成３１年２月　　青森県立図書館報　第３３号

デジタルアーカイブから

『引札：河合商店［2］』（古島竹次郎 1908）より

（詳細はhttps://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/digital/cont/t0679_08.htmlをご覧ください）

目　　次

デジタルアーカイブから …… 1
エクステンド常設展示「追悼　長部日出雄」 …… 2
こんなレファレンスがありました …… 3
こどものひろば …… 5
ご存じですか？この人・この資料 …… 6
ようこそ文学館へ！ …… 7
カウンターからひとこと …… 8

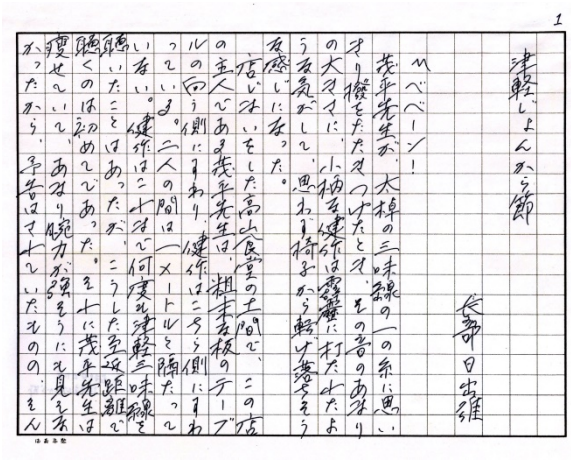
青　森　県　近　代　文　学　館
エクステンド常設展示「追悼　長部日出雄」

近代文学館では平成 30 年 12 月 6 日（木）から 5 月下旬まで、常設展示室の長部日出雄コーナーを大きく拡大し、エクステンド常設展示「追悼　長部日出雄」を開催しています。

長部日出雄さんは弘前市に生まれ、昭和 48 年に第 69 回直木賞を受賞した青森県を代表する作家です。残念ながら、平成 30 年 10 月 18 日に 84 歳でお亡くなりになりました。当館開館の平成 6 年以来、平成 13 年の「特別展 長部日出雄展」を初め、長部さんには、永きにわたって多大なる御協力をいただいて参りました。平成 30 年夏に開催した「特別展 平成の青森文学」でも、平成における その精力的な活躍を御紹介したばかりでした。

長部さんの御冥福をお祈りするとともに、当館へのこれまでの御協力に対する感謝の意を込め、長部さんの作家としての歩みをたどる展示となっています。

【展示資料】「津軽じょんから節」「津軽世去れ節」原稿



長部さんは、弘前高校から新聞記者を志して早稲田大学に進学し、念願どおり読売新聞社に入社、「週刊読売」の花形記者として活躍します。しかし、紆余曲折を経て退社、フリーライターとなりますが、身分・収入の保証がない状況から心理的不安定さを招き、次第に酒に溺れるようになりました。

身も心もぼろぼろになった長部さんでしたが、作家・吉行淳之介に作品を褒められたことに力を得て小説家になることを決意、昭和 45 年、36 歳のときに東京を離れて弘前に帰ってきました。若い頃は、古臭くて田舎臭い所としか思えなかった故郷でしたが、小説の材料を求めて津軽をくまなく歩きまわってみると、こんなに素晴らしいものがたくさんあったのかと目を開かされます。発見した故郷の魅力を次々と作品化し、「津軽じょんから節」「津軽世去れ節」で、見事直木賞を受賞します。

今回の追悼展では、長部さんが当館開館に際し、改めて書いてくださった直木賞受賞作の直筆原稿を展示しています。その文字から、長部さんの息づかいやエネルギーを感じていただけたらと思います。

―青森県近代文学館は青森県立図書館の２階です―

～　こんなレファレンスがありました　～
【第３０回】

故郷（ふるさと）の話題読み語り
番外編「“オラほの まんず めぇもの”ご紹介」

八甲田、白神の山々を抱え、三方を海に囲まれた青森県には、山の幸、海の幸と、おいしいもの、味自慢なものがたくさんあります。

皆さんも、「ふるさとの味」と思い浮かべるものがあると思いますが、故郷（ふるさと）を遠く離れた県出身の物書き達も、郷土の味に想いを馳せ、様々、書き記しています。

そうそう、確かにあれは旨いんだよな、いや、そんなに美味しかったっけかなぁあれは、などと、その味を思い起こしつつ、郷土作家と著作、故郷の味に触れるのも一興です。

さて、何の気なしに手に取った本の中で、思いもかけず、県外人が書いた、青森のおいしいものに出くわすことがあります。例えば、こんな一節です。

「亭主は取材の旅でも、わずかな時間を捻出して必ず市場へ行く。～中略～　青森へ行けば、生きている帆立貝をドラム罐の海水の中へ入れて持ち帰る。」

これは、津村節子さんが、夫君である吉村昭さんのことを綴った随筆、「くいしんぼう亭主」の一節です。

この随筆では、『ふぉん・しいぼるとの娘』や『破獄』で知られる吉村さんが、うまいものを食べ、飲むためなら、北は北海道から南は長崎まで出かけていくこと、取材旅行でさえ、わずかな時間を捻出しては市場へ行き、その土地の食物を仕込んで来るという様子が描かれています。

ドラム罐！とは、なんとも強烈なワードですが、陸奥湾で育まれた帆立は、肉厚で甘くおいしいうえに全国トップクラスの生産量！「決して誇張ではありませんよ、津村さん。お目が高い、吉村さん！」と、県民としては嬉しくなってしまいます。ついでといっては何ですが、「かやき味噌」もあわせてご紹介したいところです。

吉村さん自身も、「市場で朝食を…」（『味を訪ねて』収録）という随筆の中で、青森市の市場で買った「たらこ」について絶賛し、次のように記しています。**「最初に市場のもつ魅力にとらわれたのは、青森市の市場である。」「青森市の市場は最上の部類に入る。立ち寄れば必ずタラコを買い求め、私にとってタラコの市場でもある。」**

因みに、吉村さんは東京都、津村さんは福井のご出身です。

おいしいものを味わった記念品に、店の割りばし袋をコレクションし『割ばしの旅』という本まで出している、漫画家・デザイナーの、おおば比呂司さんが、生ツバを呑み込むほどの「うまかった想い出」として語るのは、八戸で食べた「いちご煮」です。

「いちご煮」は、ウニとアワビを潮汁に仕立て、青じそとともにいただく郷土料理ですが、おおばさんは、**「黒塗りのおわんに盛り込んだ、あったかいこのいちご煮の汁は、「うまいーッ」とあたりに人がいなかったら、叫びたいほどのものであった。」**と語り、挿絵にまで**「汁がモーレツにうまい」**と書き込んでいます。三陸の海の恵みがよほどお気に召されたご様子。そうでしょうとも！おおばさんは、北海道出身ですが、岩手県の某おせんべい屋さんのキャラクターデザインでも有名ですね。

小説家・翻訳家のコミさんこと田中小実昌さんの思い出の青森の味は、「メカブ」。

「長部日出雄さんが弘前にいたとき、この飲屋につれていってもらい、メカブをはじめてたべて、すごくおいしかった。メカブは、若布の根をほそくきったものらしいが、茹であがった瞬間、さっと色あざやかに、グリーンの色調（シェード）にかわる。」

青森では見慣れた食材ですが、こんなに美しい食べ物であったか…と、はっとさせられます。メカブ（文中では「ネカブ」と表記）については、「…なっちゃった」（『風に吹かれておんな酒』収録）でも、艶っぽい描写がされており、ちょっとどきどきさせられます。

弘前のある小料理屋で喰べた、「ふきのとうの天ぷら」が忘れられないと語るのは、小説家で雀士の色川武大さん（阿佐田哲也さん、の方がお馴染みの方も多いかも…）。連れて行ったのは、コミさんに引き続き、またまた長部日出雄さんです。初めて山菜を美味しい、と思ったという色川さん。お代わりを所望しますが、今、採って帰ったばかりで、もう無いと言われ、泣く泣く諦めます。翌日、ふきのとうへの冷めやらぬ想いを募らせたまま、十和田湖へ向かっていた色川さんは、道の両側の畔のようなところに、一列に、どこまでも、ふきのとうが顔を出しているのを車中から見つけます。

「私には何よりもそれが壮観で、十和田の山ごと、それを持ってきてしまいたいような思いにかられた。」と語っています。

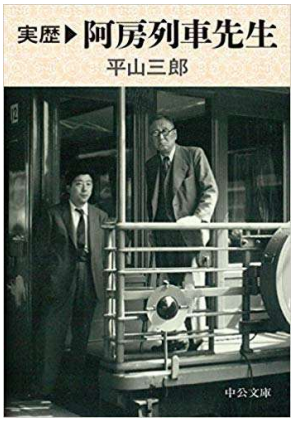
その後、東京のスーパーで買い求めたふきのとうで天ぷらを試みますが、弘前の味は再現できなかったそう。**「東京では、そういう幽玄な美味を求めるのはむりなのであろう。」**と、しんみりと締めくくっています。（天ぷらもおいしいですが、春の味覚、「ばっけ味噌」も是非ご賞味いただきたかったですね　…！）

ご自身も居酒屋「火の車」を切り盛りするなど、料理の腕に覚えありの詩人、草野心平さんが、土地の美味しいものに出会ったのは、市浦村（現：五所川原市）十三の旅館。おばあさんの手づくり「じゃこの飯ずし」が、殊の外お気に召したようです。**「じゃこはハヤである。飯ずしのハヤの背は銀色に光っており、よほどイキのよいものを使ったに違いない。心平先生は三皿もお代わりをした。**」と、案内をした武田三作さんが語っています。

さて、最後に紹介するのは、青森駅付近にあった、ラーメンについての思い出です。

記しているのは、内田百閒さん。そう、元祖乗り鉄、「鉄道に乗ること」だけを目的に旅をした、『阿房列車』の百閒先生です。

「奥羽本線阿房列車　前章」（『阿房列車』収録）で、青森にやってきた百閒先生とヒマラヤ山系君（後の小説家・平山三郎氏）。あんまり支那蕎麦は好かないんだけどなぁ、とぼやきつつ、支那蕎麦が大好物の山系君に付き合って、「焼け跡に建った新装の食堂」に入ります。



百閒先生とヒマラヤ山系君。『実歴阿房列車先生』（平山三郎/著　中央公論新社　2018）

「山系君がこの支那蕎麦はうまいと教えてくれた。僕だって、うまいさと云うと、そうではない、この麺が大変よろしい。ちぢれ工合と歯ざわりが、こんなのは滅多にありませんと云って、瞬く間に開いた大きな丼を平らげた。」

山系君大絶賛のラーメン。思わずよだれが出そうですが、百閒先生、「うまい」とは言いつつも、半分も食べずに残してしまいます。何故なら、その時、先生は歯を悪くしており、前歯がぶらぶらの状態（！）だったからです。「歯が悪いと固い物を噛むのに都合が悪いだけでなく、長い物を啜り込むにも工合が悪い。」とのこと。先生、だったら旅行前に治療してください！

さて、件のラーメン屋は、いったいどこにあったのか…。青森駅周辺にあったらしいこと（ちなみに床屋を探してうろうろし、髭を剃ってもらった帰りでした）、**「向うのテーブルのお客はカツレツ弁当を食べている。」**と書かれていますので、ラーメン以外にもメニューがあったこと位しか書かれていないため、さっぱりわかりません…。（さすが百閒先生、鉄道のこと以外は興味が薄い！）気になります。是非どなたかご調査ください！

今回は番外編として、青森を旅した方々の「まんず　めぇもの」を、ちょっぴりご紹介しました。太宰の影響ですっかり津軽の味に魅せられてしまった壇一夫氏や、秩父宮や明治天皇を魅了したあの食材の話など、まだまだ「めぇもの」の話は尽きないのですが、先に紙面が尽きてしまいました。興味のある方、典拠が知りたい方は、参考郷土室へどうぞ！

● レファレンス申込み及び問い合わせ先

青森県立図書館　参考・郷土室　電話 017-729-4311　FAX017-762-1757
電子メール　sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

こども の ひろば

青森県津軽地方の昔話が、津軽弁で７編収録された**『なんげえはなしっこしかへがな』**（北彰介/文 太田大八/絵）が 2018 年に再刊されました。

銀河社から 1979 年に出版され、長らく入手が難しい状態でしたが、今回、BL 出版から復刊され、再度手に取ることができるようになりました。

作者の北彰介さんは青森市出身の童話作家です。青森県児童文学研究会の初代会長をつとめられ、県内の児童文化活動家の第一人者でした。その北さんが本書のあとがきで「なんげえはなしっこ」のことを語っています。

半年も雪に閉じ込められる北国津軽の子どもたちは、おばあさんから聞く昔話がなによりの楽しみ。ひとつが終わると「もうひとつ」、またそれが終わると「もうひとつ」と、いくらでもせがんで聞きました。すると、話すのに飽きたおばあさんが「果てなし話」をしだします。終わりのない昔話の中に、同じ言葉が何度も何度も繰り返し出てくることで、子どもたちが飽きるのをねらっているそうです。

北さんは、次のような言葉であとがきを締めくくっています。

「津軽弁のまねをする必要はありません。熊本の人は熊本の、京都の人は京都のアクセントやイントネーションで、この「なんげえはなしっこ」を読んで（語って）ください。」

そうは言っても、本場の語りを聞きたくなりますよね。BL出版のホームページでは、津軽弁・語り部の野澤秀昭さん（青森県児童文学研究会会長）の声で、本書収録「くりの実」の朗読を聞くことができます。（http://www.blg.co.jp/blp/n_blp_detail.jsp?shocd=b08819）ぜひ体験してみてください。

また、北さんはこのほかにも**『せかいいちのはなし』**（金の星社 1976）や**『けんか山』**（草土文化 1978）など、津軽弁で描かれた絵本を多く遺しています。

方言で書かれた絵本は、ほかにも出版されています。

南部弁の**『絵本　八の太郎』**（しょうぶけたねやす/文 ふじたけんじ/絵 文芸協会出版 1975）は、南部の力もち八の太郎が竜になり、川を作って村を救ったというお話です。これは、十和田湖の主となり、のちに秋田の八郎潟の主になった八の太郎の伝説が元となっています。

県内の方言だけでなく、アイヌ語や関西弁、土佐弁、博多弁、沖縄方言などの絵本もたくさん出版されています。昔話だけではなく、現代のお話でも描かれることも多くなっています。それぞれの土地の独特な言葉のリズムを感じてみるのもいいかもしれませんよ。

江戸中期に活躍した俳人であり、文人であり、画人であった建部綾足（たけべあやたり）という人物をご存じでしょうか。綾足は、享保４年（1719）に津軽藩家老津軽校尉（こうい）政方の次男として江戸に生まれ、弘前で幼年期を過ごしました。本名を喜多村金吾久域（ひさむら）といいます。

父方の祖母は、儒学者であり山鹿流兵学でも名の知れた山鹿素行（やまがそこう）の娘であり、母は甲州流兵学者大道寺友山の娘でした。由緒正しい家柄に生まれ上級武士としての将来が約束されていたであろうに、兄嫁との不倫により、その恵まれた地位、身分を捨て、故郷弘前を出奔します。綾足二十歳の春のことでした。その後は、全国を遊歴し、俳諧、随筆、国学、絵画と多方面で名を知られるようになりました。再び故郷弘前へ戻ることはなく、安永３年（1774）江戸で亡くなりました。

絵への関心が芽生えたのは、俳句の大家であり、画家でもあった彭城百川（さかきひゃくせん）と出会ったことがきっかけになりました。長崎へ二度にわたり遊学し、熊代熊斐（くましろゆうひ）、石崎元徳、清人費漢源（ひかんげん）に師事して花鳥画や山水画を学び、のちに**『寒葉斎画譜（かんようさい）』**などの絵手本を出版しました。寒葉斎は画家としての雅号。ほかに孟喬・建凌岱・建長江などを用いています。

当館所蔵資料のなかに**『四季竹図』**と題した綾足作の六曲一双の屏風があります。屏風に描かれている絵は、四季それぞれの竹の情景をあらわしたもので、春・夏・秋・冬が三曲ずつに分かれており、それぞれの季節にふさわしい竹の絵が鮮やかに描かれています。

『四季竹図』 https://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/digital/cont/t0008.html

この作品は、青森県立図書館デジタルアーカイブで公開しております。画像を拡大して細部までご覧いただけます。

また、当館では、**『建部綾足全集　全９巻』（国書刊行会　1986-1990）**をはじめとして、綾足関連の資料を所蔵しております。綾足生誕 300 年にあたるこの機会に綾足の作品や人となりに触れてみてはいかがでしょうか。

参考資料　『彩の人　建部綾足』（玉城司著　新典社　1998）
『建部綾足研究序説』（松尾勝郎著　桜楓社　1986）

ようこそ文学館へ！

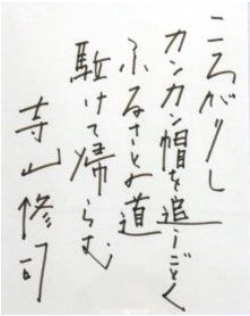
近代文学館資料の紹介（第 32 回）

企画展「１３人の書画展」資料から

青森県近代文学館では平成 31 年 5 月 19 日（日）まで「１３人の書画展」を開催しています。今回は、現在展示している資料の中から、寺山修司の色紙とそれぞれにまつわる不思議をご紹介します。

①「ころがりしカンカン帽を追うごとくふるさとの道駈けて帰らむ」

＜新収蔵資料＞

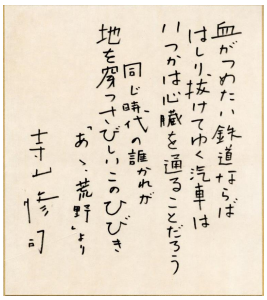


寺山修司は中学時代から詩・俳句・短歌を学校新聞などに発表するなど、その異才ぶりを発揮していました。昭和 29 年早稲田大学在学中に、第 2 回短歌研究新人賞を受賞します。

「ころがりし…」の短歌は「転がるカンカン帽を追うようにふるさとの道を走って帰ろう」という意味です。葉名尻竜一氏は著書『寺山修司』（平成 24 年、笠間書院）の中で、「短歌上の＜私＞は、一体『少年』なのだろうか、それとも『大人』なのだろうか。」と問いを投げかけています。「『少年』ならば、あまり『ふるさと』とは表現しないだろう」し、「『大人』は恥ずかしくて、『カンカン帽』を走って追いかけたりはしない。」と。「なるほど…」と思わず考えてしまいます。みなさんはこの短歌の主人公をどのように捉えますか？

②「血がつめたい鉄道ならばはしり抜けてゆく汽車はいつかは心臓を通ることだろう　同じ時代の誰かれが地を穿つさびしいこのひびき」

この色紙は「『あゝ、荒野』より」と書かれています。「あゝ、荒野」は寺山修司の長編小説ですが、色紙に書かれたフレーズは単行本『あゝ、荒野』（昭和 41 年、現代評論社）には見られません。「血がつめたい」から「通ることだろう」までのフレーズは、実は「現代詩手帖」昭和 41 年 6 月号に発表された長篇詩「ロング・グッドバイ」の冒頭部分なのです。どうして「『あゝ、荒野』より」と書かれているのか気になります。



企画展示室にはご紹介した寺山修司の色紙の他、常設展示の作家たちの直筆の書軸、短冊、色紙、スケッチ等を展示しています。新収蔵資料や、普段はなかなか展示されない大型の資料もありますので、ぜひご覧いただけたらと思います。入場は無料です。みなさまのお越しをお待ちしています。

カウンターからひとこと（第 31 回）

今回は、一般閲覧室の**“テーブル展示”**についてお知らせします。

今年度から、一般閲覧室カウンター前で新たに**テーブル展示**を行っています。

テーブル展示とは、職員それぞれがテーマを設定し、それに関連する本を期間限定で紹介しているものです。

テーマは、「花火」や「冬を楽しむ」などの季節に合わせたもののほか、「ミニチュアの世界」「日本刀のかたち」「アイドル考」といった、職員の趣味・嗜好が伺えるものもあり、バラエティに富んだ展示となっています。これまで行われたテーブル展示は、平成３１年１月現在で９４テーマにのぼります。

展示期間はそれぞれ１～２週間の期間限定ですので、どのテーマに出会えるかは来館時のお楽しみです。

普段は書庫にしまってある本が展示されることもあるので、書架に並んでいない本を見ることができるチャンスでもあります。今後のテーブル展示も、ぜひお楽しみに！

また、１２月の蔵書点検による休館明けから、**書架の面展示の数が大幅に増えました！**

表紙を出して展示することで、背表紙だけではわからなかった、さらなる本の魅力に気づくことができます。

また、職員による本の紹介パンフレットも設置しております。どうぞご自由にお持ちください。